



被災者支援における「物語」の位置

澤野 美智子

(立命館大学)

本特集は東日本大震災後のコミュニティ支援に関して「物語」という観点を中心に論じている。筆者の専門である文化人類学領域でも、災害、そして東日本大震災と被災者支援に関する数々の研究がなされており、支援の難しさが多く論じられている。本稿ではこれらの先行研究の論議をふまえ、本特集の要となる「物語」を用いた被災者支援について検討する。

木村 [2013] によれば、1920年代に端を発する社会科学の災害研究は、1970年代後半に転換期を迎え、途上国の災害における「脆弱性 (vulnerability)」が画一的な開発計画の実施や中央一現地間のずれ・歪みによるものであることを指摘するようになる。内尾 [2018] によれば、災害は誰かれ構わず襲いかかるが、先進国よりも発展途上国において被害が甚大になる傾向があり、途上国の中でも富裕層より貧困層がその影響を受けやすい。同じ生活水準のコミュニティ内部では、高齢者や障害者、子ども、女性 (とりわけ妊婦)、エスニック・マイノリティなどが、避難中や復興過程の生活において他の人々以上の命の危険やストレスに晒されることがある [内尾 2018: 5]。

このような脆弱性に対して人類学者は「定性的な調査を通じて、政策やプロジェクトが現地との間に生み出しやすい乖離を指摘し、修正の必要性を訴える」[木村 2013: 25] ことを実践してきた。その方向性として二つがあり、一つは脆弱性の構築性 (脆弱性が歴史的・文化的・政治的な要因の重なりによってダイナミックに形成されること) についての研究、もう一つは住民の主体性の重視 (脆弱性という概念の受動性を批判し、住民による積極的な活動やローカルな知識に目を向けること) である。

木村 [2013] によれば、コミュニティが自ら災害

に立ち向かう主体性は、「対応力 (capacity)」「レジリエンス (resilience)」「社会資本 (social capital)」等と呼ばれ、災害対応に関する「コミュニティ」の重視と行政による支援は現在、世界的なトレンドとなっている。ただし「レジリエンス」「災害文化」「地域防災力」などの言葉が十分な検討を経ないままに行政や現場で大々的に取り入れられ、多様な実践が生み出されているという。

東日本大震災に関しては、発生直後に被災地で人類学・社会学の調査を行うこと (被災地の混乱に乗じて平常時では得難きデータを収集に行くこと) の是非を問う声があり、学問としての被災地への貢献よりも災害現場のデリカシーに配慮すべきとする自粛論、慎重論が優生であった [内尾 2018: 30]。ただしその中でも、支援活動を被災地への入口としてフィールドワークを行った人類学者たちによって研究がなされ¹⁾、人類学による社会貢献の可能性を示し

1) 内尾 [2018] によれば、東日本大震災後の人類学者の主な動きは以下のとおりである。木村周平が他の日本の人類学者に先駆けて「震災の公共人類学」の構想を試みた。震災以前から公共人類学の推進者であった山下晋司も、人類学による貢献のありかたを模索し始め、自身が理事長を務めるNPO法人を通じて被災地への直接的なコミットメントを行なった。関谷雄一は科研費助成事業「震災復興の公共人類学——福島県を中心とした創造的開発実践」を2014年度より開始した。東北大学の高倉弘樹は、震災1年後に『聞き書き震災体験——東北大学90人が語る3・11』を刊行したほか、宮城県の委託事業として多数の研究者や大学院生による民俗文化調査を行い『無形民俗文化財が被災するということ——東日本大震災と宮城県沿岸部地域社会の民族誌』を刊行した。竹沢尚一郎はボランティア活動に参加したことをきっかけに断続的におよそ8ヶ月間、被災地に滞在し『被災後を生きる——吉里吉里・大槌・釜石奮闘記』を出版した。日本文化人類学会の学会誌『文化人類学』は、76巻1号に市野澤潤平・木村周平・清水展・林勲男による「東日本大震災よせて (資料と通信)」を掲載し、78巻1号に林勲男・川口幸大による特集「災害と人類学——東日本大震災にいかに向き合うか」を掲載した。また、日本をフィールドとする多国籍の人類学者によって『東日本大震災の人類学——津波、原発事故と被災者

ている。

その中で指摘された、東日本大震災の被災者支援をめぐる課題の一つとして、緊急を要するニーズがあるにもかかわらず被災者が援助を拒否する現象が少なからず見られたことが挙げられる。この現象についてマクジルトン [2013] は、まず官僚文化と地方文化の相互作用という観点から分析し、物資が被災者の一部にしか行き渡らない量であればクレームが出た時に責任を問われるため誰にも配らないほうが良いという行政の保身を描き出した。さらに、東北の人びとの外部者に対する不信感、貰ったものにはお返しをするという互酬の意識、我慢強さや協調性が美德とされる文化も、支援の拒否に関係していることを指摘した。

また、スレイター [2013] は支援の受け入れ問題について、ボランティアと被災者の間の人間関係という観点から分析した。ボランティアはお返しを必要としない純粋な「贈り物」を被災者に届けようとするが、人類学者のモースが1925年に『贈与論』で述べているように純粋な贈り物は存在しない²⁾。そのため被災者たちはボランティアの援助を受けながらも自尊心を守る工夫をしている。

一方、内尾 [2018] は、災害の当事者にとっての不安 (insecurity) や屈辱 (indignity) の源を特定することが重要であると指摘する。内尾が被災地での調査で目にしたのは「支援を受け取ることに苦悩し、津波ではなく防波堤に不安を感じ、還らぬ人々の落ち着く先を案じ続ける人間の姿」であった [内尾 2018: 244]。被災者たちは多様な支援者たちと対峙していた期間、社会的弱者としての被災者像を引き受けさせられ、まちづくりの主導権の明け渡しを

余儀なくされていた。そして南三陸町が日本を代表する慰霊や教訓の拠点になったことで、町内の死者の個別性や遺族の当事者性はむしろ薄められた。内尾によれば、「支援を受け取ることに苦悩し、津波ではなく防波堤に不安を感じ、還らぬ人々の落ち着く先を案じ続ける人間の姿」は、多様な支援者によって引き起こされる現状を深刻なものとして捉える被災者の思考における「尊厳」の現れ方を示すものであった。

これらの先行研究が示すように、被災者支援は、現場で必要とされる質と量の援助を提供することさえできれば事足りるというものでは決してなく、支援の対象となる被災者の負担感や自尊心、元々の地域文化も考慮に入れる必要がある。その点で、本特集で試みられているような「物語」を核とする支援のありかたは、被災者と外部者の双方向的なやりとりを基盤とし、あらかじめ定まった方向に誘導するのではなく共に方向性を模索するものであり、一般的な被災者支援とは性質を異にしている。

類似した試みとして、経済学者・歴史学者として人々の聞き取りを続ける大門 [2017] は、陸前高田の高田保育所長である佐々木理恵子さんの話から、3・11以前の保育が地域の人たちや陸前高田の自然に囲まれていた様子を知る。身近な保育所にも大事な歴史があり、それは今後の復興のための蓄積にほかならないと大門は述べる。

本特集の村本論文は、自分たちの事は自分たちでやるという当事者の主体的決意と「物語る力」がレジリエンスの源となり、外部者は「聴く力」を発揮することでそれを支えると述べる。団論文で紹介される「木陰の物語」漫画展はその作用の具体性を示す。そしてその漫画展で来場者の語りを分析した斎藤論文は、漫画展の「物語」が鑑賞者に自己を振り返らせ、「省察」と「感情」の絡み合った喚起を促すことを示す。さらに鶴野論文は、民話を〈語る－聞く〉という営為が災害・厄災からのレジリエンスを生み出すメカニズムを明らかにしている。また中村論文は地域の状況に基づく支援者支援のありかたを模索している。

ギルらは「現実として起こった出来事とそれに対する文化的解釈の関係性は相互的である。ナラティ

の「その後」(ギル・トム, シテガ・ブリギッテ, スレイター・デビッド編)が日本語に翻訳・出版された。内尾太一もまた、震災発生前から準備していたNPOの立ち上げを契機に、宮城県南三陸町の被災地に関わり、支援活動をするだけでなく復興現場での調査も行うようになった。その成果を博士論文「大規模自然災害と人間の安全保障——東日本大震災の公共人類学」(東京大学)にまとめ、単著『復興と尊厳——震災後を生きる南三陸町の軌跡』を刊行した。

2) モースは、贈与を構成する3つの義務として、与える義務、受け取る義務、返礼の義務があると述べた。それらのいずれも、拒むと「社会関係を結ぶことを拒否する」というメッセージを相手に与えたり、自分の社会的地位や権威を失ったりする恐れがある。

ブ、すなわち「語り」は、現実を描き出す反面、新しい現実を作り出すこともある」と述べている [ギル・シテータ・スレイター 2013: 9]。このような視点をアクティヴ・インタビューという概念として提示しているのが、社会構築主義者のホルスタインとグブリアム [2004] である。アクティヴ・インタビューにおいては「回答者の話は、固定された情報の貯蔵庫からもたらされた現実の報告のコレクションとはみなされない。その代わりに、回答者の物語はインタビュアーとの協同を通して、現実の諸側面を編成していく方法であるという視点から考察される」 [ホルスタイン・グブリアム 2004: 200]。

アクティヴなエージェントである語り手は、いまここで直面する相互行為に基づいて語りながら、インタビュアー（調査者）と協同して現実を構築してゆく。それは物語をでっちあげることではなく、自分の経験や感情などの様々な組み合わせを創造的に表現する行為である [ホルスタイン・グブリアム 2004: 76-77]。

アクティヴ・インタビューは、本特集のように被災者の「物語」を聴くことや、それを基盤とする支援のありかたについて考える上でも有効な概念である。つまり被災者の情報の貯蔵庫にあるものを切り取って提示してもらうというよりは、被災者と外部者が相互にやりとりする中で「物語」が編み出され、協同作業として新たな現実を築いてゆく作業を、本特集は進めてきたと考えることができる。被災者に話を聞きに行き、あるいは漫画の冊子を被災地の人たちに配り、漫画展を訪れた人びとに話を聞き、それをさらに社会に発信する作業は、まさにアクティヴ・インタビューの目的である「物語を生み出す力に刺激を与えること」 [ホルスタイン・グブリアム 2004: 70] を多次元で体現している。

その意味で本特集は、災害後の被災地において支援対象となる被災者の負担感や自尊心、元々の地域文化を考慮しつついかに支援するかという課題に対する一つのモデルを示している。このモデルは、他の地域や災害においても活用できる可能性を持つであろう。

参考文献

- 内尾太一, 2018, 『復興と尊厳——震災後を生きる南三陸町の軌跡』東京大学出版会。
- 大門正克, 2017, 『語る歴史, 聞く歴史——オーラル・ヒストリーの現場から』岩波書店。
- 木村周平, 2013, 『震災の公共人類学——揺れとともに生きるトルコの人びと』世界思想社。
- ギル・トム, シテータ・ブリギッテ, スレイター・デビッド, 2013, 「イントロダクション:3・11を語る」ギル・トム, シテータ・ブリギッテ, スレイター・デビッド (編), 『東日本大震災の人類学——津波, 原発事故と被災者たちの「その後」』人文書院, pp.7-28。
- スレイター・デビッド, 2013, 「ボランティア支援における倫理——贈り物と返礼の組み合わせ」ギル・トム, シテータ・ブリギッテ, スレイター・デビッド (編), 『東日本大震災の人類学——津波, 原発事故と被災者たちの「その後」』人文書院, pp.63-97。
- ホルスタイン・ジェイムズ, グブリアム・ジェイバー, 2004, 『アクティヴ・インタビュー——相互行為としての社会調査』山田富秋・兼子一・倉石一郎・矢原隆行 (訳), せりか書房。
- マクギルトン・チャールズ, 2013, 「支援を拒む人々——被災地支援の障壁と文化的背景」ギル・トム, シテータ・ブリギッテ, スレイター・デビッド (編), 『東日本大震災の人類学——津波, 原発事故と被災者たちの「その後」』人文書院, pp.31-62。
- モース・マルセル, 2009, 『贈与論』吉田禎吾・江川純一 (訳), ちくま学芸文庫。

(2019. 12. 3 受理)

(ホームページ掲載 2020年4月)